食と農をつなぐ架け橋

第1回：どう考えますか？“食と農の乖離”という現実を！

連載企画第３弾では、**農業の理解促進**について、常日頃、私が考えていることを、「食と農をつなぐ架け橋」と題して発信します。地域農業の将来を考える上で、参考にしていただければ幸いです。また、流通関係者、消費者の方も、是非、読んでください。

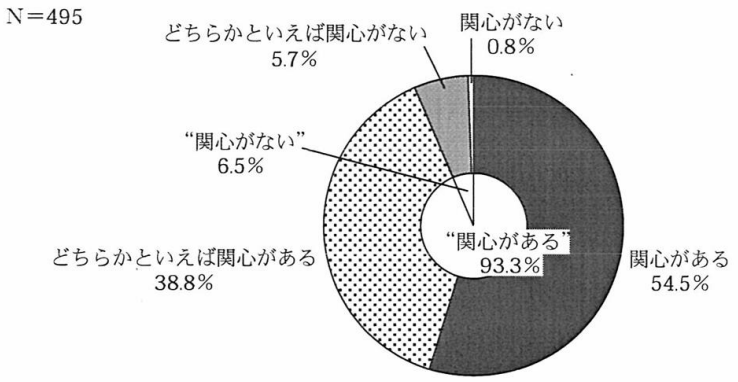
３年前、ある大学から食育の講義を頼まれました。私は、「食と農をつなぐ架け橋」という演題で講義し、「３つの衝撃」について話しました。今回は、その一つ目の衝撃を紹介します。

平成２１年に愛知県が実施した県政モニターアンケート「農林水産業の現状と将来に向けた取組について」の結果を引用します。県政モニターは、県政の主要課題に関するご意見を伺うため、性別、年代、居住地域を考慮して選ばれた５００名の方々です。このアンケートにおいて、食育への関心について聞いたところ、「関心がある」と答えた方は９３％ありました。

食育への関心

あなたは、「食育」（※）に関心がありますか。（回答は１つ）

（※「食育」とは、規則正しい食生活や栄養バランスのとれた食事などを実践したり、食を通じたコミュニケーションやマナー、あいさつなどの食に関する基礎を身につけたり、自然の恵みへの感謝や伝統的な食文化などへの理解を深めたりすることのできる人間を育てることです。）



将来の我が国の食料供給のあり方については、「できるだけ国内で自給をするべき」と答えた方が８６％ありました。

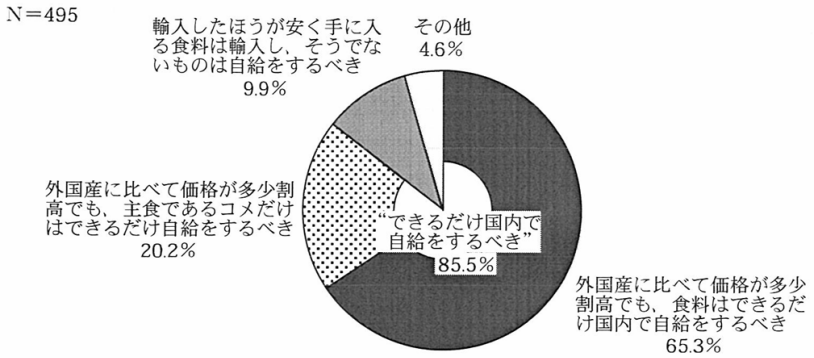
将来の我が国の食料供給のあり方

現在、我が国は世界中の国・地域から食料を輸入し、豊かな食生活を実現していますが、その一方で、日本のカロリーベースの食料自給率（※）は40％まで低下し、主要先進国中で最低となっています。

あなたは、将来の我が国の食料供給のあり方について、どのようにすべきだと思いますか。

（回答は１つ）

（※カロリーベースの食料自給率：日本国内で食べられている食料のうち、日本国内で生産された食料が、カロリー（熱量）換算でどのくらいの割合であるのかを示す指標。）

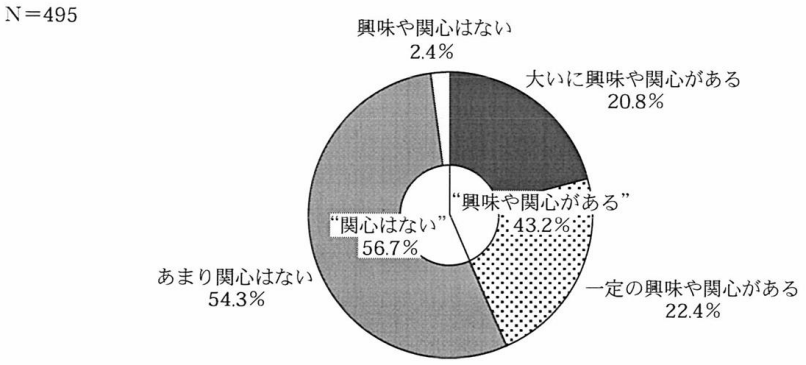


しかし、**「農林水産業への関心」については、「関心はない」と答えた方が57％もあり、私は愕然としました。**

農林水産業への関心

本県は、自動車産業に代表される工業が盛んな工業県のイメージがありますが、平成19年の農業産出額は全国５位を誇るなど、農林水産業（一次産業）も盛んな県です。

あなたは、本県を含め、我が国の農林水産業に関することについて、どの程度、興味や関心がありますか。（回答は１つ）



ある時、講演をする機会があり、参加者にこの質問をしてみました。同じパターンの答をした方（即ち、食育に関心があり、食料もできるだけ国内で自給をするべきと考えるが、農林水産業には関心がない）がみえ、理由を聞くと、「スーパーで購入すれば済むから」という答が返ってきました。**農産物を電化製品や加工食品と同じように考えている**のです。「富士通がないなら日立でいいさ」、「味の素がないならキューピーでいいさ」といった具合に考えているのでしょう。まさに、**食と農が乖離している**のです。

私は、食育とは食と農をつなぐ架け橋であると考えるようになり、食育活動の中で、農業の理解促進を図っていく必要性を痛感しています。そして、**この問題を解決する糸口は、「農業体験」、「地産地消」、「多面的機能の理解」の3つであると考えています**。

食育基本法（平成１７年７月施行）の前文には、「食育を、生きる上での基本であって、知育、徳育及び体育の基礎となるべきものと位置づけるとともに、様々な経験を通じて『食』に関する知識と『食』を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てる食育を推進することが求められている」と謳われています。

「食に関する知識と食を選択する力を習得すること」や「健全な食生活を実践することができる人間を育てること」は、確かに重要なことであると思いますが、食育の本質は、少し違うところにあるのではないでしょうか。

私は、「食育とは、感謝する心を育てることである」と考えています。一緒に食卓を囲む人たちに感謝する、食事を作ってくれた人たちに感謝する、食材を生産してくれた人たちに感謝する、そして、「いただく命」に感謝することだと思うのです。

このように考えれば、食と農が乖離することなどあり得ません。こんな「食育」を推進していこうではありませんか。皆様はどうお考えですか。次回は、二つ目の衝撃を紹介します。（次回に続く）

食と農をつなぐ架け橋

第2回：心に響く農業体験

今から遡ること１５年。平成１２年に、農業構造改善、都市農村交流を担当していた私は、農業体験ツアーを企画しました。今でこそ、民間会社のツアー企画としても珍しくありませんが、当時は、草分け的な取組でした。

私が考えた企画は、手づくり体験、農業体験、農業施設見学等を３本柱とするものでした。チャーターした観光バス１台で、名古屋市内から出発し、県内の都市農村交流施設を訪ねました。１２年度に、旧鳳来町の「山びこの丘」、美浜町の「ジョイフルファーム鵜の池」、田原市の「サンテパルク田原」の３か所、１３年度に、旧足助町の「グリーンファーム三ツ足栗園（現足助みたち栗園）」、碧南市の「あおいパーク」、旧旭町の「旭高原元気村」の３か所で実施しました。

農業体験ツアー

	手づくり体験	農業体験	農業施設見学等
山びこの丘 （旧鳳来町）	そば打ち	とうもろこしもぎ取り	昼食：自分で打ったそば
ジョイフルファーム鵜の池（美浜町）	炭焼き	さつまいも掘り取り もちつき	集出荷施設見学 里山ハイキング
サンテパルク田原 （田原市）	ウィンナーづくり		園内散策 蔵王山展望台
グリーンファーム三ツ足栗園（旧足助町）		わらび狩り ます釣り	釣ったます炭火焼き
あおいパーク （碧南市）	ミニイタリアン教室	さつまいも掘り取り もちつき	海浜水族館
旭高原元気村 （旧旭町）	リースづくり	きのこ探し・鑑定	村内散策 昼食：芋煮鍋

碧南市の「あおいパーク」で実施した時のことです。午前中に、地

域の食材を使ったミニイタリアン教室、午後からは、さつまいも掘り取り体験、もちつき体験、海浜水族館見学という内容でした。参加者のアンケートを見ると、さつまいも掘り取り体験の人気が圧倒的に高く、参加者の感動や興奮した様子が伝わってきました。確かに、さつまいもの掘り取り体験は人気のある収穫体験であると思います。地上からは見えないだけに、収穫の瞬間はとてもわくわくするものです。「芋づる」という言葉があるように、つるを引き抜いた瞬間、大豊作であれば、その感動は最高潮に達することでしょう。

しかし、その時は体験時間の制限などもあり、既に地上部は片付けられていて、参加者は１列に並んで、割り当てられた２株ずつを収穫するというものでした。「どの株がいいかなあ」と選ぶ余地はありませんでした。それにもかかわらず、参加者は大満足していたので、私は大変驚くとともに大きな衝撃を受けました。二つ目の衝撃です。農業の現場から縁遠い人たちには、土に触れること、農作業を体験することは、非日常的で、とても新鮮で心踊ることなのでしょう。まさに、**「心に響く農業体験」**になるのです。

農家数が減少する一方、非農家数は増えています。と同時に、農業体験のニーズも増加しています。実際に、自分で作物を栽培してみると、無農薬では、病害虫のコントロールが大変難しいこと、よく雑草が伸びること、また、農業は天候に大きく左右されることなど、とてもよく実感できます。私は、このことが重要なポイントであると思うのです。

連載企画第１弾の第５回で、「地域の消費者に地域農業の応援団になってもらいましょう」と書きました。この応援団は、**「農の心を理解する」応援団**であれば最高です。市民農園、体験農園などを組み合わせ、「農の心を理解する」応援団づくりを後押しする取組が大変重要であると考えています。

皆様はどうお考えですか。次回は、三つ目の衝撃を紹介します。（次回に続く）

食と農をつなぐ架け橋

第3回：日本人はこんなにご飯が好きだったのか！

５年前のゴールデンウイークのことです。岡山県に、「たまごかけごはん」でまちづくりに取り組む地域があると聞いて訪ねました。中国自動車道の院庄インターチェンジを降りて、国道５３号線を南へ１２キロほど行くと、美咲町中央運動公園の案内標識が見えてきました。交差点を右に曲がり、「たまごかけごはん」ののぼり旗が両側に立ち並ぶ道路を道なりに進んでいくと、「食堂かめっち」に到着しました。

営業時間は朝９時から午後５時まで。私たちが到着したのは、午後４時５８分。滑り込みセーフでした。順番待ちのお客さんが５０人くらいいました。食べ終えた人が、「３杯食べた」、「４杯目にギブアップした」などと話しており、みんな満足そうな顔をしていました。待つこと約１時間。店に入ると、２０席の座席がある店内は、木の温もりを感じる心地よい空間です。

卵、ご飯、味噌汁、漬物がセットの黄福定食が１食３００円（現在は３５０円）。美咲町だけで味わえる、食べるときっと幸せな気持ちになれる、たまごかけごはん定食です。卵とご飯はおかわり無料。おかわりしない人は見当たりません。「こんなにご飯を食べたら太っちゃう」なんて言っている女性もいません。私はこの情景を見て、「**日本人はこんなにご飯が好きだったのか！**」と大きな衝撃を受けました。三つ目の衝撃です。このような取組が全国に広がれば、米の消費量は、減少に歯止めがかかり、増加に転ずることも夢ではないと思いました。

店の人の話では、当初、１日５０人ぐらいと想定していたところ、ゴールデンウイークには、毎日５００人近い人が訪ねてくるとのことでした。朝７時から仕込みを始め、最後のお客さんが帰るのは午後６時すぎ。休む暇もないそうです。きっと、おなかもすいているだろうし、疲れてもいるだろうと思いながら、笑顔を絶やさずお客さんをもてなす店の人に頭が下がる思いでした。

「ごはんに生たまごをかけただけ」というシンプルさが、人の心をとらえたのでしょうか。シンプルなだけに、素材が大切。美咲町の「たまごかけごはん」は、町内で栽培された「棚田米」と、西日本最大級の養鶏場「美咲ファーム」から入荷した赤玉「森のたまご」。味噌、漬物、醤油、さらには器も「美咲町産」というこだわりようです。

美咲町大垪和西棚田（平成２２年７月撮影）

美咲町出身で、明治時代を代表するジャーナリスト岸田吟香氏が「たまごかけごはん」を愛好し、全国に広めたという説があります。そこに着目して取組を始めた美咲町の「たまごかけごはんによるまちづくり」は、「**棚田の保全と米生産、米の消費拡大、そして地域おこし」という一石三鳥の取組として成長を続けています**。

近い将来、再訪したいと思っています。皆様も一度、訪ねてみませんか。（次回は最終回です）

食と農をつなぐ架け橋

最終回：ともに築こう！地域の豊かな生活

今回は、農業の理解促進について考えてみたいと思います。その有力な手段として、地産地消がよく引き合いに出されます。地産地消とは、「地域でとれた農産物をその地域で消費する流通形態」で、フードマイレージの観点から環境にやさしい取組です。

私は、平成２０年度以降、県職員として県独自の地産地消の取組である「いいともあいち運動」に関わってきました。地産地消のメリットは、消費者にとっては、「新鮮な農産物を入手できる」、「生産状況の確認も可能で、安心感が得られる」、「食と農について理解を深める絶好の機会となる」などが考えられ、また、生産者にとっては、「消費者ニーズを捉えた生産が可能」、「流通経費の削減による収益性の向上」、「心強い応援団が得られる」などが考えられます。さらに、地域にとっては、「地域経済の活性化」、環境面では、「環境負荷の軽減」などのメリットが考えられます。

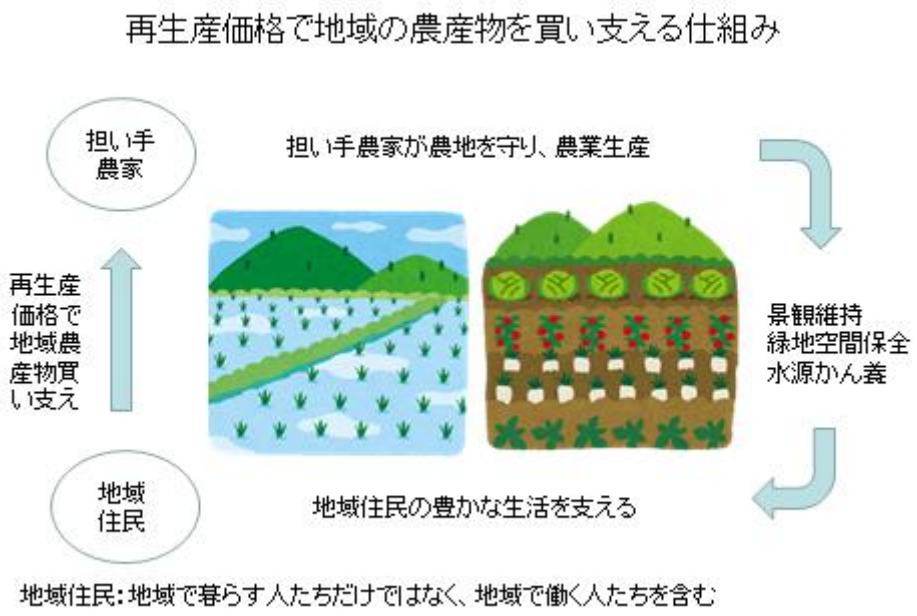
いいともあいち運動は、今年で１８年目を迎えています。いいともあいちネットワークの構築、シンボルマークの制定、いいともあいち推進店の登録を進め、運動が始まって１０年が経過した平成２０年度から、３つの新たな取組に着手しました。一つ目は、認知度の向上を図るため、県産農林水産物及びそれを使った商品へのシンボルマークの表示です。二つ目は、運動の幅を広げるため、商工業界と連携した農商工連携ビジネスフェア（商談会）の開催です。そして、三つ目は、県産農林水産物の利用拡大を図るため、学校給食に加えて企業の社員食堂等における地産地消の取組の推進です。

そして、最近では、県産農林水産物を応援する輪を一層広げていくため、いいともあいちサポーターの募集、イメージソングの作成、フェイスブックを活用した情報発信と相互交流などに取り組んでいます。しかし、シンボルマークを表示した商品は以前より減少したように感

じますし、企業の社員食堂との接点も切れてしまい、残念に思っています。

農業の理解促進を図る上で、地産地消は重要な要素であることは間違いありません。しかし、これまでの取組の延長では、先が見えています。食育を通じて取り組むことはもちろんのこと、農業の持つ多面的機能や生活環境、さらには、地域おこしも含めて、総合的に進めていく必要があると強く思うのです。

連載企画第１弾第５回のメッセージを再度発信します。担い手農家が農地を守り農業生産をします。そのことにより、景観が維持され、緑地空間が保全され、農地の水源かん養機能が保たれます。そして、地域住民の豊かな生活が支えられます。地域住民はそのことの大切さを理解し､再生産価格で地域の農産物を買い支えるというループです。地域住民とは、その地域で暮らす人たちだけではなく、その地域で働く人たちも含みます。これが、私が考える「再生産価格で地域の農産物を買い支える仕組み」です。



地域は、そこで暮らす人たち、そこで働く人たちみんなで成り立っています。地域の豊かな生活をともに築いていきたいものです。そういう生活者の視点で、農業の理解促進に取り組んでいきませんか。

担い手農家は、再生産価格で販売できなくなれば、離農を選択するかもしれません。そうなると、このループは崩壊し、地域住民の豊かな生活、さらには、地域で操業している企業の活動にも影響を及ぼすことでしょう。

先ずは、企業で働く人たちに、地域の産業まつり、農業まつりへの来場を呼びかけるところから始めましょう。そして、企業の社員食堂において、地域の農産物の利用を提案しましょう。また、社員に地域の米の購入を斡旋するとか、地域の農産物のカタログギフトを作成してお中元・お歳暮での利用を働きかけるなどやってみませんか。取組の輪は次から次へと広がっていくことでしょう。

先の閣僚会合でＴＰＰが大筋合意されました。今後、１２か国それぞれの議会での承認が必要となりますが、**TPPの影響を最小限に食い止めるためには、国や県の支援策はもちろんのこと、我が国の農業に対する消費者の理解促進が必要不可欠**です。ＴＰＰ問題は食料問題です。**農業の理解促進を通じて、我が国の食料自給率の向上、そして、地域の豊かな生活をともに築いていく必要がある**という“私の熱き想い”を発信して、連載企画「食と農をつなぐ架け橋」を終わります。

次の連載企画では、これまでのメッセージで十分伝えきれなかったことを、もう少し掘り下げ、「ともに築こう！地域の豊かな生活」と題して発信します。